

武庫川流域委員会
運営委員長 松本 誠殿

井戸知事の再度のコメントに対する意見

平成 18 年 1 月 21 日 奥西一夫

私は昨年 12 月 12 日付の意見書「井戸知事のコメントに対する意見」で、10 月 28 日に松本委員長から知事に中間報告を提出した際に知事から出された 3 点ほどの意見についての意見を申し上げました。ところが、今月 18 日の流域委員会に出席された知事は再び「基本高水の設定に際して平成 16 年 23 号台風による水害を無視するのは適当でない」という旨の発言をされました。委員会の議事録をきちんと読んで頂ければ、委員の誰一人としてこの時の水害を無視したり、無視すべきだなどと発言してはいないことがお分かり頂けると思います。したがって、それではなぜ繰り返しそういう発言が出たか、と再度詮索せざるを得ません。

流域委員会では、基本高水は 100 年確率の 24 時間降雨に対応するハイドログラフとして決定するのが適当という県の提案を了解して基本高水の検討をおこなっています。委員会では 23 号台風で武庫川が一部区間で溢水し、その箇所を含めて甚大な水害が発生したことに深い関心を持って審議をしていますが、同時にその時の 24 時間雨量が約 10 年確率程度のものに過ぎないことも、県当局提供の資料で知っております。そして甲武橋地点のピーク流量が約 2,900m³/s と推定されていることも知っております。この流量を基本高水流量として設定すると、明らかに過小な基本高水を設定することはいうまでもないことであり、知事がこのような低い基本高水流量を設定すべきだとの見解をお持ちのようにはとても思われません。それではこの時の 24 時間雨量を 100 年確率に引き伸ばしたものを棄却したことをもって、23 号台風を無視したとお考えかも知れません。しかしこれは引き伸ばされた架空の降雨を棄却したのであって、23 号台風の時の降雨を棄却したものではありません。それでは県当局が提案した棄却基準に問題があるとおっしゃるのでしょうか。

棄却基準にはいつのデータを入れ、いつのデータは無視する、というような基準は含まれておらず、あくまでもすべてのデータから、統計理論に基づいて実際には起こり得ないような降雨パターンを棄却するものです。それに対して知事は、他の時の降雨パターンを棄却しても良いが、平成 16 年の時のパターンは棄却してはならないと主張されるのでしょうか。

私は前回の意見書で、流域委員会は過去 30 年ほどのデータを基本的に平等に扱っていることと、100 年確率の洪水を考える時に、わずか 30 年の中で新しい水害を特に重視して他の水害を無視するのは、「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」と揶揄されるような感覚を基本高水論議に持ち込むものだ、と反論していますが、知事は再び「喉もと過ぎれば・・・」シンдрロームにあえて落ち込もうとされるのでしょうか。是非ご意見をお聞かせ下さい。

もう一つ、問題にしなくてはならないのは、ハリケーン・カトリーナによる災害からの教訓に関して述べられたことです。知事は「河川をもっと強固なものにすればより安全になる」ということがこのハリケーンが遺した教訓だという趣旨の発言をされました。しかしそれは全くの見当違いだと言わざるを得ません。ミシシッピ川は 1993 年の洪水で大氾濫を起こしましたが、その時得られた教訓は、「堤防を強化すると氾濫は起こりにくくなり安全度は増すが、堤防の近くに人

家が張り付き、超過洪水の際に壊滅的な被害を起こすので、安全度はむしろ低下する」というものでした。そしてその後におこなわれた対策は堤防をより強固なものにすることよりも、危険区域にある人家を排除することでした。ニューオーリンズでも同様の方針が採られましたが、それが功を奏する前に不幸にもカトリナが来てしまったということなのです。

それでは上記の方針転換は誤りだったのかというと、そうではありません。1997年の河川法改正が、従来の堤防、ダム建設一本槍の治水行政を転換するものであることは周知の通りです。現に国交省が組織した淀川水系流域委員会では河川施設の整備と並んで下流域の被災ポテンシャルを増大させないことを治水の重要事項として挙げています。

再びニューオーリンズに戻りますと、パラペット状の堤防が波浪に耐えきれなくて破堤し、激甚な災害の直接原因であったことには誰も異論を唱えないと思いますが、直接原因と本質的な原因を取り違えると大変なことになると思います。知事は早く武庫川を頑丈にすることが何よりも重要だと力説されましたが、知事の意を体した河川計画課の見解は、「河川整備の基本方針が実現するのは極めて遠い将来のことで、時期はクエッションだ」としています。そのような遠い将来を考えた時、河川を頑丈にする事だけを考えた前世紀の治水だけをおこなうことが最良の治水方針でしょうか。

言い換えれば、100年に1度程度の洪水にはびくともしないが、それをはるかに超える洪水が起こると1993年のミシシッピ川流域や2005年のニューオーリンズのようになり、被災地の復興もままならず、肉親を失った人々の心の傷は何十年も癒えないというような武庫川を目指すのか、あるいは時には氾濫することもあるが人が死ぬことはなく、持続的な社会発展が担保されるような武庫川を目指すのか、とすることだと思います。この点についても改めて知事のお考えをお聞きしたいと思います。